

コロナ禍における取り組み事例

コロナ禍の生活支援

《常磐学区 1/4》

テーマ：活動について(生活支援に関する取り組み)

アパートの3階で独り暮らしの、体の衰えが目立ってきた男性高齢者からの依頼で、自分のベッドが傷んでおり、友人宅に譲ってもらったベッドがあるので運搬して欲しいと依頼されました。軽トラックを持っている、ご近所ボランティアがいることを知っているの依頼でした。

ベッドはかなり重量があるイメージがあるので、軽トラックに載せられるか、また、アパートの3階まで運べるかが心配でした。見てみて無理だったらあきらめてもらうことを条件で日時を決め、二人のご近所ボランティアで他学区の友人の市営住宅で依頼者と待ち合わせました。現物を見てみると組立式のシングルのパイプベッドで軽いものだったので安心してトラックに積み込み、依頼者のアパートに運搬し、二人で3階まで上げ、部屋の中に入れることができました。

依頼者からは、かつてないほどのお礼の言葉をいただきました。



コロナ禍における取り組み事例

コロナ禍の生活支援

《常磐学区 2/4》

テーマ：活動について(生活支援に関する取り組み)

一軒家に一人で暮らしている高齢女性の方から庭の桜の木を選定の依頼がありました。数年前にも一度剪定しています。枝がフェンスを越えて道路に延びて、電線にも届きそうでした。葉が落ちると毎日道路の掃除をしなければならず迷惑もかかるので担当民生委員を通じ依頼されました。

剪定作業はいつもの「木こり部隊」と称する男性ボランティア6名と、剪定した枝を細かくして袋詰めをするため女性ボランティア3名とで作業しました。ふつうは一時間を目安にしていますが、どうしても時間オーバーしてしまいます。それでも何とか道路に出ている部分はきれいに剪定できました。

コロナ禍でも屋外なので声を出し合って楽しく作業できました。終了後、依頼者からお茶とお菓子を出していただきました。



コロナ禍における取り組み事例

コロナ禍の生活支援

《常磐学区 3/4》

テーマ：活動について(生活支援に関する取り組み)

県営住宅に一人で住む高齢男性。数年前に同じ住宅の方から、この男性が公園の水飲み場で体を洗っていて、部屋の水道・電気・ガスが止まっているようだとの連絡がありました。しかし、訪ねて行っても「大丈夫だ」と追い返されていました。

区役所の福祉課に連絡し、担当者が訪問しましたが、会えず、「連絡ください」と置手紙をしたが連絡はなかったとのこと。本人からの依頼がないので心配はしていましたが、行動出来ずにいました。その間も、夏の暑い日に外で寝ていた、声をかけても相手にしてくれないという状況が続きました。

10月に東部いきいき支援センターからこの男性の部屋の片づけを手伝ってほしいと依頼がありました。その男性が、いよいよ困って町内会長に相談に行き、仕事・暮らし自立サポートセンター（暮らサポ）につながり、食糧支援とライフラインの再開も行なわれたとのことでした。

部屋の片付けには暮らサポから1名、いきいき支援センターから3名、区社協から1名、区政協力委員が1名、ご近所ボランティアが3名で部屋の中には5～6名で、残りのメンバーでごみの運搬を行い、部屋の片づけ、ごみの処理等を実施しました。相当量のごみが出るので環境事業所にも連絡がしてありました。

その後は、いきいき支援センターの担当者が訪問し、生活保護につながったそうです。福祉専門職とボランティアの協力がうまくできた事例です。

コロナ禍における取り組み事例

コロナ禍の生活支援

《常磐学区 4/4》

テーマ：活動について(生活支援に関する取り組み)

アパートに住む独居女性（要支援1）。毎年依頼があるリピーターです。年末になり、一年間使った換気扇のフィルターが油汚れてその交換作業をしています。高いところの作業はできなくなって困っていたようで担当民生委員に相談し、支えあい相談窓口を紹介され、その後、直接電話が来るようになりました。毎年、男性ボランティア2名で作業します。フィルターの交換依頼ですが、羽根・油受けの清掃も同時に行います。また今回は、蛍光灯の点灯管の交換とカバーの清掃も実施しました。マスクをしての作業はちょっと息苦しいですね。



コロナ禍における取り組み事例

コロナ禍でできること

《昭和橋学区 1/1》

テーマ：広報、その他

コロナ禍で必需品となったマスクですが、使い捨てるものを繰り返して使用している年金暮らし高齢者を見かけるという話題があがった（汚れが目立ち、かえって不衛生な状態で、使用しているケースも見受けられた）。

年金生活でギリギリの生活をしている方も少なくないとのことで、コロナ禍での生活費にも影響しているのではないかとのお話し合いを行った。

一人暮らし、夫婦のみ世帯高齢者（民生訪問対象者）を中心に支えあいを利用いただいた登録者など、必要なところへ配るよう調整することとした。

マスクを調達し、ボランティアコーディネーターのつながりで障がい授産施設へ袋詰めを依頼。

個別包装されたものにチラシを挟み込み、相談窓口のPRもあわせて実施する予定でいる。



コロナ禍における取り組み事例

コロナ禍の生活支援

《千音寺学区 1/2》

テーマ：活動について(生活支援に関する取り組み)

外出困難な高齢者のみ世帯の方への支援で、認知症の妻と支える夫に対し、喫茶店でお茶をしながらコミュニケーションを図っている。夫婦だけの老老介護は、介護者の精神状態を悪化させていた。

このケースでは、ボランティア側よりお誘いの電話を入れ、外出の予定をたてている。最近では、時間のゆとりも取れるようで、ゆったりとした時間を過ごされているとのことだった。(ほぼ毎日関わりをもった成果でもある)

窓口では、これまで関わった利用登録者や相談者に対して、気になる方については、電話で近況をお聞きしている。

今年度は、コロナ禍で相談の訪問は少なくなっているが、従来と比べて生活支援活動は増加傾向にある。また、登録ボランティアへ活動依頼をかけると、とても活き活きと話されることも多く、ボランティアへのモチベーション維持にも繋がる結果となった。

コロナ禍における取り組み事例

ボランティア交流会

《千音寺学区 2/2》

テーマ：活動について(生活支援に関する取り組み)
住民相談窓口について(ニーズキャッチするための取り組み)

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、支えあい活動も自粛をしてきた。コロナ禍では、活動を通じて誰かとつながっていることに気付くこともあり、これまで何かしらの活動で常に関わりを持っていたボランティア同士も希薄化が目立ってきていることを問題視した。「今までつながっていたものが失われてしまう。」「顔を合わす機会が少なくなったため、心配・・・」「コロナ禍でもボランティア同士で交流会をしたい」との声が上がり、ボランティア交流会を実現させた。今後の支えあい活動について意見交換やアンケートなど実施でき、以下のような意見も寄せられた。



- ・ 誰にも会わないことがこんなにも寂しいのかと思った。
- ・ 仲間同士で言葉を交わし、励まし合うことが大事だと思った。
- ・ この支えあい活動を継続してほしい。

こんな時代だからこそ、つながるきっかけ作りを模索しなければいけないと再認識できる良い機会となった。

コロナ禍における取り組み事例

サロン参加者とのつながり

《八幡学区 1/2》

テーマ：広報、その他

以前から学区内3ヶ所のサロンで、カレンダーづくりが行われていました。折り紙の得意なボランティアさんが作った折り紙を、参加者がカレンダーに貼り付けて完成させます。

折り紙の材料は、ボランティア同士が持ち寄った新聞広告などを活用しています。

カレンダーには翌月のサロンの日程が印してあり、四季折々の絵柄のカレンダーを参加者さんは家に貼って楽しんでいました。

新型コロナウイルスの感染拡大により、サロンは開催自粛となりましたが、折り紙つきカレンダーは普段通りボランティアさんにより作られ、民生委員さんが訪問する際にサロン参加者さんに届けられました。



コロナ禍における取り組み事例

息子死去後、一人暮らしになった高齢者の支援 《八幡学区 2/2》

テーマ：活動について(生活支援に関する取り組み)

息子が死亡後一人暮らしとなったが、室内にはごみが散乱した状態になってしまっていた。

市外にいる弟が時折のぞいていたが、日常的な支援できず、いきいき支援センターに相談。いきいき支援センターとボランティアコーディネーターが来訪し、室内の状況を確認。本人・弟の了解を得て、いきいき支援センターと連携し、部屋を片付ける活動を実施した。

現在は、サービス利用を開始し、民生委員も見守りをしている。

コロナ禍における取り組み事例

公園掃除をボランティア交流会の場に！ 《五反田学区 1/2》

テーマ：担い手づくりについて(ボランティア講座、意識啓発の取り組み)

(課題)

平成29年10月困りごと相談窓口開設、5年目になります。相談件数は、月平均1.5件と低調。ボランティアの活動が見えない状況にありました。



(内容)

コロナ禍ではありますが、ボランティアと町内会に声を掛け、K公園とM公園の掃除を実施しました。雨で一週間延期になりましたが、K公園は総勢20人、M公園は総勢15名が集まりました。ボランティアは支えあいの黄色のベストを着用して、町内会の人達と一緒に、草取り、落ち葉の掃除を行い、公園で遊ぶ子どもさん、親御さんに喜んでいただきました。

(所感)

コロナ禍で感染拡大防止の観点から、保健委員から反対の声もありましたが、予防対策をしっかりとすることで問題なくやりきることが出来ました。又、支えあいのベストを着ることで、見えるボランティア活動をアピール出来たと思います。

コロナ禍における取り組み事例 《五反田学区 2/2》

登録ボランティア一人ひとりがスピーカーでありアンテナ！

テーマ：住民相談窓口について(ニーズキャッチするための取り組み)

(課題、きっかけ)

登録ボランティアの中には、ご近所の困りごとを吸い上げ、情報を窓口に寄せる方がおられます。しかし、多くの登録ボランティアは派遣待ちのボランティアです。

(内容)

登録ボランティア一人ひとりがスピーカー、アンテナであることを認識し、ご近所の困りごとを吸い上げることを意識して活動が出来れば、支えあいの成果が出て、ご近所付き合いも良好になると思います。そのために、相談窓口をオープン化し、ボランティア情報収集日やボランティア相談日を設け、交流会の場を作っていきたいと思います。

(所感)

ご近所付き合いで信頼関係を築きながら、自然な形で支えあいが出来ればと思います。

コロナ禍における取り組み事例

コロナ禍の生活支援

《中島学区 1/1》

テーマ：活動について(生活支援に関する取り組み)

(課題、きっかけ)

コロナ禍により、個人宅に入っでの活動に感染拡大防止の観点から、難色を示されるボランティアさんの声があがった。

(内容)

緊急事態宣言発令中は、安易に活動依頼を受けるのではなく、緊急性を勘案し、依頼を受けるという方針をとることにした。

(所感)

ボランティアの依頼者も当然大切であるが、登録ボランティアさんも高齢の方が多いため万一のことがあってはいけない。

こういう事態だからこそ、慎重に行動する必要があると感じた。



コロナ禍における取り組み事例

コロナ禍における取り組み事例

《戸田学区 1/3》

テーマ：担い手づくりについて(意識啓発の取り組み)

戸田学区地域支えあい活動連絡会議を令和2年11月に開催し、町内の関係者に報告した。その報告資料は、活動記録を調査すると共に地域の方やボランティアコーディネーターと話し合い、今後の取り組み(課題)としまとめた。その内、担い手づくりに関連する内容を紹介します。

- ★コロナ禍で支援活動の場が少ない影響もあるが、登録ボランティア163名が活用されていない現状を把握。名簿のリスト以外にも「出身母体別（民生委員など）」「名前順」と整理し、使いやすさの改善を行った。しかし、得意な分野が把握しきれていないため、声が掛けにくいことも分かってきた。それを深掘りすることで沢たくさんの人に活動の機会を作れるようにする事。
- ★ボランティア活動を通じての体験談をお話する機会を作り、情報共有し活動に活かしてもらおうこと。活動した事のみでなくその活動を次に繋げる事。
- ★ボランティア登録者の多くは町内の役員を経験された方で、人生経験豊富な人達です。これらの人達からご指導をうけて困りごと支援活動を想定した技能取得(例えば網戸張替え・蛇口水漏れ等々)し支援活動に繋げる事。

これらの事案は、コロナ禍の制限解除後の活動になるが、その時までできる限りに事をやっていきたい。

コロナ禍における取り組み事例

コロナ禍における取り組み事例

《戸田学区 2/3》

テーマ：活動について(生活支援に関する取り組み)

コロナ禍でサロンや給食会等々の開催が減り孤独に陥っている人の声を多く聞くようになった。民生委員から一人暮らしの80歳代女性が不安から1日に数回救急車を呼ぶ事を繰り返し、病院からは1日何度も救急車で来られても困ると相手にされなくなった。又、早朝から自宅に電話がかかってくるので困り、話し相手になって欲しいと相談を受け、話し相手から公共料金支払いや買物支援を行うようになった。その支援に並行し、いきいき支援センター分室に連絡し、どの様に対応すべきか相談を重ねた。

独居での寂しさや健康不安が原因となっているという事から老人施設入所の方で1週間のお試しコースを検討。お金の管理と決定権を持つ親族の甥にいきいき支援センター分室が了承の確認を取り入所の運びとなった。

この女性は港区で美容院を経営されていたが立ち退き（理由は不明）で戸田地区に転居されてきた。美容院時代は毎日店に立ちお客さんと話をされていたが環境が変わり、さらにコロナ禍で会話がなくなった事が発端であったように思う。

今では施設の方との関係もうまくいき、元気になられた。

コロナ禍における取り組み事例

コロナ禍における取り組み事例

《戸田学区 3/3》

テーマ：活動連絡会議について(地域の実情や課題を共有する取り組み)

活動連絡会議は、各地区ブロック代表とコーディネータ・役所関係合計25名で開催しているが、もう少しコンパクトにし、担当者を絞り全体での情報公開を密に出来る様にした方が良いのではないかと思う。

開設より1年やってみて特にコロナ禍でなかなか連絡しあえない、集まりにくい事がみうけられる。実際に支えあい事業に関わっていない人が代表になっているのは形式だけで実がないことがわかった。コロナ禍で依頼が少ないが、この人達を活用し、地域に広げるアクションを起こす事が今は課題である。

